

『いはでしのぶ』の右大将の笛

— 異分子の音 —

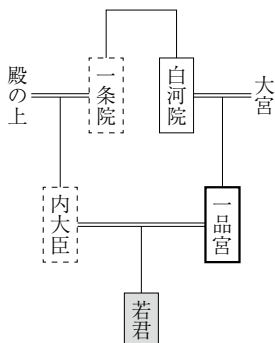
毛利香奈子

一、はじめに

王朝物語文学に多く登場する楽器のひとつが笛、特に横笛である。同じく頻出する琴は、男女両方に奏でられ、一つの琴を複数の人物が演奏する。それに対して横笛は、大半が男君に奏でられ、複数の人物が一つの笛を共有して演奏することは少ない。その理由について利沢麻美は「横笛が元々管楽器として人間の息が音になるという、人に密着した面を特性として備えている上に、これを吹く貴公子たちが、自分の楽器を常に懐にし身近であったからだろう」としており、所有者の男君とより密接に関わるのが、横笛の特徴だと言えるだろう。横笛は、女君の琴に対する応答の楽器として、男女の関係の始まりに多く用いられる。その一方で、男君の人生の転機に描かれることも多い楽器である。例えばそれは、『うつほ物語』で俊蔭女といぬ宮の琴と合奏する仲忠の笛であり、『源氏物語』で夕霧・源氏を經由して薫に相伝される柏木の笛であり、『狭衣物語』で天

稚御子を出現させる狭衣大将の笛である。王朝物語文学において横笛に代表される笛は、単なる楽器ではなく、男君の人生と深く結びつき、運命を共にする役割を担った存在だと考えられる。

『源氏物語』『狭衣物語』などの先行作品の影響を受けた中世王朝物語『いはでしのぶ』にも、横笛や高麗笛が登場するが、物語の展開に影響を及ぼすアイテムとして描かれるのは、最終巻の巻八のみである。というのも、『いはでしのぶ』の物語前半で中心となる楽器は琴なのである。中でも一品宮の



半で中心となる楽器は琴なのである。中でも一品宮の琴は、その音色が物語世界の音楽の基準となっていることが示される。その一品宮の琴の奏法と楽器は息子の若君に継承されるが、若君は父内大臣の琴の奏法も

受け継いでいる。系図に明らかのように、白河院と一条院に分かれていた皇統は、若君の即位によって融合する。つまり、若君の身には二つの皇統譜の血と琴の音が宿っているのである。

即位した若君が琴を演奏する巻四の場面が、あたかも大団円のように描かれるのは、若君の琴の音と王権の様相が符合しているからだろう。そのためか、巻五以降の現存本文には琴が描かれなくなり、代わりにクローズアップされるのが笛である。本作の巻三以降は抜書きの本文しか残っていないが、巻八終盤の右大将にまつわる笛の場面は、その中でも比較的多くの本文が残されている。『いはでしのぶ』にとっても、笛が右大将と深く結びつく重要な事物であったことを示すようでもある。また、巻八に集中する笛の叙述は、『源氏物語』柏木の笛、『狭衣物語』狭衣大将の笛と、場面設定や表現に類似点が見出せる。

先行作品を經由して、笛の奏法の相伝、笛そのものの相伝を読み解くと、右大将の笛が持つ二つのルーツが見えてくる。それは、現存本文が少ない物語後半の中心人物である右大将の人物造型を考える上で、大きな手がかりになるだろう。

笛の叙述が集中する『いはでしのぶ』巻八で展開される、右大将物語の概要を確認しておく^{注5}。右大将は、時の関白〔二位中将〕の息子で、将来を嘱望される貴公子である。母前齋院は、右大将を出産して間もなく死去しており、右大将は大叔母である一品宮のもとで育った。白河院で共に育った一品宮の娘である二品宮を密かに想う右大将だが、彼女は父関白〔二位中将〕のもとに降嫁してしまう。さらに妻女四の宮が異母兄左大将と

通じ、右大将はその不義の子を実子として養育することになる。厭世観を強めた右大将は、最後の参内で高麗笛を演奏し、異母弟である新二位中将に遺愛の横笛を託して、宰相中将と共に吉野へ旅立つ。

吉野に赴く直前の右大将の様子を描いて閉じられる『いはでしのぶ』の結末は、横溝博^{注6}が指摘するように「ある種、平穏なエピソードを形象して締め括られているところは、いわゆる悲恋遁世譚とは一線を画す有りよう」である。その結末についてさらに考察を加えるにも、物語の末尾に集中する右大将にまつわる笛の叙述は重要だろう。本稿では、『いはでしのぶ』の笛を『源氏物語』『狭衣物語』と比較しながら、笛を通して本作後半の右大将物語を捉え直していきたい。

二、「音の限り」——示される奏法の相伝——

『いはでしのぶ』巻八で笛の叙述が集中する箇所は二つあり、そのうち演奏する右大将の様子が詳しく描かれるのは、宮中で高麗笛を試奏する場面である。以下、本文を引用し、重要な箇所¹に傍線を引いた。

①右大将、宮中で高麗笛を試奏する

暮れ行く空さへ、心細くながめられ給ふに、新しく人の奉れりける高麗笛を、試みさせ給はんとて、大臣〔二位中将〕の御前に置かれたる、少し鳴らして、興じ申し給ひつ

つ、うち置き給ひぬる、なごりやなかなかに思しめさるらん、右大将御気色あるを、常はさばかりたやすからず、かしこき御前にても、残りなくはあらじと思いたりしかど、折からの忍びがたさと言ひ、これもこの世の別れの中には、何にも過ぎたるなごりにて、賜はり給ひつつ、**音の限り**、

惜しまずつかうまつり給へるおもしろさ、なごめにやあらん。大臣〔二位中将〕も、昔よりさばかり吹き伝へ給へるにも、すごうものあはれに、限りなく澄み通れる方は、をさをさ劣るまじく聞こゆるを、常よりことに、誰も聞きおどろかせ給ふを、大臣〔二位中将〕も、さらでだにこの君をば、けしうはあらずと、ことにつけても思ひきこえ給ふに、今宵の御笛の音には、さまざま、昔のあはれまで思し続けられて、〔右大将が〕生まれ給ひし頃の有様、ほどなくはかなくなり給ひし〔前齋院の〕御ことも、ただ今の心地し給ふに、…

(巻八―三三二)

①傍線部のように右大将が珍しく高麗笛を躊躇なく演奏し、それを聞いた父大臣〔二位中将〕が、点線部のように昔を思い出す場面になっている。はじめに注目したいのは、『源氏物語』『狭衣物語』の両方と共通する表現「音の限り」である。『源氏物語』では薫の演奏に、『狭衣物語』では狭衣大将の演奏に、『いはでしのぶ』では二位中将と右大将の演奏に「音の限り」が用いられている。三作品に共通する笛の奏法を表す言葉を切り口

として、それぞれの笛の性質を比較していく。二つの先行作品では横笛が、『いはでしのぶ』では高麗笛が、「音の限り」を用いる対象となっている。高麗笛が外来の楽器であることに留意しつつ、一旦その違いについては保留とし、「笛」という大きな括りで三作品を比較していきたい。

『いはでしのぶ』では、右大将の他に、その父である二位中将が「音の限り」笛を演奏している。巻一終盤、一条院で一品宮の琴と合奏する二位中将の横笛は、「御琴の音に心もうき立ちて**音の限り**吹きとほし給ひつる御笛(巻一―七四)」と叙述される。横笛と高麗笛の違いはあるものの、右大将の高麗笛試奏場面①でも「大臣〔二位中将〕も、昔よりさばかり吹き伝へ給へるにも」と、二人の奏法の類似が示されている。右大将が父から直接音楽教育を受けたことを示す本文は残されていないが、「音の限り」の特徴を持つ笛の奏法は、二位中将と右大将のつながりを示す標準となっていると考えて良いだろう。

『源氏物語』宿木巻では、藤花の宴で演奏する薫の笛に、「音の限り」が用いられている。

②藤花の宴の遊び、薫の笛の演奏

笛は、かの夢に伝へし、いにしへの形見のを、またなきものの音なりとめでさせたまひければ、このをりのきよらより、または、いつかはえはえしきついでのであらむと思して、取う出でたまへるなめり。大臣和琴、三の宮琵琶など、とりどりに賜ふ。大将〔薫〕の御笛は、今日ぞ世になき**音**

の限りは吹きたてたまひける。

〔源氏物語〕宿木巻―四八一、四八二〕

②傍線部のように、横笛巻で一条御息所から夕霧にもたらされた柏木遺愛の笛を吹く薫の様子が「音の限り」と叙述されている。笛は演奏していないが、一条御息所が夕霧に横笛の来歴を語る場面にも「音の限り」が用いられている。柏木が生前に遺した言葉「みづからもさらにこれが音の限りはえ吹き通さず。

思はん人にかで伝へてしがな（横笛巻―三五七）」が明らかになる箇所である。柏木は笛を「音の限り」吹くことはできず、それができる人物に笛を譲りたいと考えていたのだ。それを実現させたのは、②で笛を「音の限り」吹く薫である。ちなみに、「吹き通」す薫の笛の音を聞いた八の宮は、薫の出生の秘密を知らないにもかかわらず、「致仕の大臣の御族の笛の音（椎本巻―一七一）」だと感じている。笛の奏法や音色によって柏木と薫がつながることについて、浅尾広良は「（音の限り）吹き通すことで」薫は笛の正統な伝承者と位置づけられ、これにより柏木の意志も達成される」とし、高橋亨は「薫の出生の秘密に関する象徴コードとして、笛の音が響いている」と指摘する。『源氏物語』の笛の場合、楽器としての笛そのものの相伝だけでなく、「音の限り」で表される奏法やその音によっても、薫と柏木のつながりが示されているのだ。

『狭衣物語』の狭衣大将は、琴や琵琶など複数の楽器を演奏するが、「音の限り」が用いられるのは、巻一で笛を演奏する

場面のみである。

③狭衣、笛を演奏し、奇瑞が起こる

帝、東宮を始めたてまつりて、いかなることぞ、とあさましう思しめし、騒がせたまふに、中將の君〔狭衣〕、もの心細くなりて、いたう惜しみたまふ笛の音をやや残すことなく、吹き澄まして、

〔狭衣〕稲妻の光に行かん天の原はるかに渡せ雲のかけ橋

と、音のかざり吹きたまへるは、げに、月の宮古の人もいからか聞き驚かざらん。

〔狭衣物語〕巻一―四三〕

薫と同様に横笛を惜しまず吹く狭衣の様子に、「音の限り」が用いられている（傍線部）。『源氏物語』に則れば、狭衣の笛もまた、奏法が血縁者とのつながりを示すものだと考えられる。

ところが、狭衣の笛の音は「大臣（堀川大臣）の笛の音にも似ず、世の常ならぬ音は誰伝へけん（巻一―四一）」と帝に評されており、笛自体も帝が用意している。このような『狭衣物語』の音楽の特徴を田村良平は「楽器伝授の関係が読み取り得る例はあまりなく」と指摘し、植田恭代は「相伝ではないのに超人的な音色を響き渡らせるのが狭衣の楽才」だとする。つまり、『源氏物語』では薫と柏木のつながりを示す奏法の標章として用いられていた「音の限り」が、『狭衣物語』では誰にもつな

がりをもたない狭衣の笛の奏法に用いられているのである。

以上の三作品の比較から、『いではしのぶ』は「音の限り」を、『源氏物語』の薫の場合と同様に、「血の相伝^{注11}」と重なる笛の奏法の系譜を表すものとして用いていると言える。その一方で、右大将の笛には『狭衣物語』の狭衣の笛に接近している部分も見られる。『源氏物語』の薫の場合は、笛の奏法だけでなく笛そのものも柏木から相伝されていることは前述したが、『いではしのぶ』で右大将が吹くのは「新しく人の奉りける高麗笛（巻八―三三二）」で、血縁者から相伝されたものではない。高麗笛の試奏は帝の命に従って行ったのであり、平素は「残りなくはあらじ（巻八―三三二）」としていた笛を「音の限り」独奏してしまつたのである。狭衣もまた、「一人づつ手を尽くすべきなり（巻一―三三八）」と帝と東宮に強要され、「いたう惜しみたまふ笛の音をやや残すことなく（巻一―四三三）」音の限り横笛を独奏している。右大将が笛を演奏する状況設定は、むしろ『狭衣物語』に近いものである。

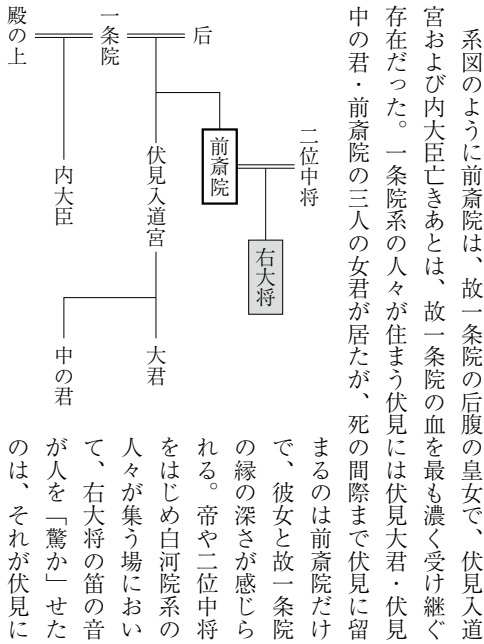
三、異分子の音―「驚か」せる音―

帝の御前で笛を「音の限り」独奏する狭衣と右大将には、その音色が及ぼす効果に共通点が見出せる。狭衣の演奏も右大将の演奏も、何かを「驚か」せるものとして叙述されているのである。『いではしのぶ』の右大将の演奏は、「誰も聞きおどろかせ給ふ（巻八―三三二）」とされ、聴く人を「驚か」せている。

その直前に同じ高麗笛を試奏した父二位中将の音には認められない効果であり、右大将個人の資質に由来するものだと考えられる。右大将の笛を耳にした二位中将は、音に触発され「昔のあはれまで思し続けられて（巻八―三三二）」と、幼い頃の右大将と、その母である前斎院を思い出している。一方狭衣の笛は、宮中での独奏場面で「月の都の人もいかでか聞き驚かざらん（巻一―四三三）」とされる。それ以外でも、物語の冒頭で狭衣の超越性が説明される箇所では、「〔琴・笛の音が〕天人も驚かしたまひつべけれ（巻一―二六）^{注12}」、決別の琴を斎院の前で奏する場面では「神仏も聞き驚かせたまふけしきなるを（巻三―一九九）」と、たびたび「驚か」せるものとして叙述されている。いずれも人ではなく、この世ならざるものを「驚か」せる音として認識されているのである。それを裏付けるように、狭衣が演奏する音に触発されて、巻一では天稚御子が降臨し、巻三では天照大神の託宣が下った。以上のように、右大将は「人」、狭衣は「天」と、それぞれの演奏が作用する対象は異なるものの、「驚か」せる音によって、その対象に何らかの変化をもたらす性質は共通していると言えよう。

ところで、演奏者とその演奏が作用する対象との間には、どのようなつながりがあるのだろうか。狭衣の笛の音が天に作用して天稚御子と呼ぶことについて、田村良平は「これらの靈異は狭衣がともすると現実世界から離脱してしまう可能性を秘めた危うい存在であることを示す」とし、井上眞弓は「この事件の発生により、狭衣に対する「天人の天降りたまへる」という

世間の人々による噂は決定的基盤を与えられ、狭衣の超俗的属性はもはや疑い得ないものになってしまった」とする。言い換えれば、狭衣は地上の人間ではなく、天界にルーツを持つ異分子だと、天に作用する笛の音が証明しているのである。『いはでしのぶ』の場合、右大将のルーツの手がかりとなるのは、右大将の笛に触発されて二位中将が回想する「昔」である。二位中将が思い出しているのは幼少期の右大将および前斎院である。今井上^{注15}が指摘するように、「笛の音によって呼びおこされる過去とは、単なる過去ではない。現在とは決定的に隔てられた過去」なのだとする、右大将の笛の音が呼び起こすのは、主に故人である前斎院にまつわる記憶だと考えられる。



系図のように前斎院は、故一条院の後腹の皇女で、伏見入道宮および内大臣亡きあとは、故一条院の血を最も濃く受け継ぐ存在だった。一条院系の人々が住まう伏見には伏見大君・伏見中の君・前斎院の三人の女君が居たが、死の間際まで伏見に留まるのは前斎院だけで、彼女と故一条院の縁の深さを感じられる。帝や二位中将をはじめ白河院系の人々が集う場において、右大将の笛の音が人を「驚か」せたのは、それが伏見に

まつわる「昔」を思い出させる、一条院系に連なる人物による音だったからである。つまり、右大将の笛の音は、右大将のルーツが一条院の系譜にあることを証明する、白河院系の人々にとっては異分子の音なのだ。ちなみに、巻一序盤では、一条院の落胤である内大臣も笛を吹いており、彼の琴・笛の音もまた「人の耳おどろくばかりの音(巻一―一四)」だと評されている。「弾き合はせ(巻一―七二)」が重視^{注16}されていく。人を「驚か」せる笛の音を持ちながら琴を選んだ内大臣は、一条院系にルーツを持ちながらも、白河院系に取り込まれていったのである。『狭衣物語』の狭衣は、天を「驚か」せる横笛の音によって、人の世には収まらない、天にルーツを持つ異分子だと示された。『いはでしのぶ』の右大将は、人を「驚か」せる高麗笛の音によって、白河院の系譜には収まらない、一条院系にルーツを持つ異分子だと示されている。右大将が横笛ではなく外来の高麗笛を演奏するのも、狭衣が奇瑞を起こしたように、右大将がその場において異質であることを際立たせるためであろう。『狭衣物語』の笛との類似は、『いはでしのぶ』の右大将が、二位中将の息子・撰閑家の後継者とは別の一面を持つことを示唆していると考えられる。

四、笛の相伝―持ち主の行方―

(卷八一三三六、三三七)

異分子の音を奏でる右大将のその後は、卷八にあるもうひとつの笛の場面から読み取れる。宮中で高麗笛を試奏したその日の夜に、右大将は父二位中将の居宅である二条院を訪れる。そこで異母弟新二位中将と対面する場面に、笛が登場するのだ。

④ 右大将、新二位中将に横笛を譲る

〔新二位中将〕「久しく笛も吹き合はせ給はねば、わびしき心地なんしつる」とのたまふも、いとあはれにをかしければ、〔右大将〕「げにこのほどは、そうそうなることどもありてなん。さらば、今宵なん、ちと吹き給へ」と、聞こえ給へば、いとうつくしうもてつけて、懐より取り出でて吹き給へる。さらにこのほどの人のしわざともなく聞こゆるを、我は吹きさして、聞き給ひつつ、**皇后**より伝はりたるとて、嵯峨院に候ひつる御笛を、いつぞや月の宴に、この大将〔右大将〕またなくつかうまつり給へりける、感に堪へず、賜はり給へりしが、この年頃、おろかならず、御身離れざりしを、取り出で給ひて、〔右大将〕「これは、かうかうなりしものなれば、世の常ならぬを、つひにも奉るべければ、暁よりもへまかりて、四、五日あるべきほど、御もとに置き給ひて、しばしの絶え間なれど、思し出でん折は、吹きて遊び給へ」とて、取る手も映るばかり、にほひことなるを、奉り給ふとて、：

嵯峨院から相伝された横笛そのものを、右大将が新二位中将に譲渡している箇所注目し、笛本体の相伝についても、『源氏物語』『狭衣物語』の場合と比較する。まず『狭衣物語』の場合は、結論から述べれば、笛そのものは相伝されていない。それがわかるのは、狭衣が天稚御子と共に昇天せんとする場面である。

⑤ 狭衣、笛を帝に渡そうとする

：〔狭衣は〕我はこの世のこともおぼえず、めでたき御ありさまもいみじうなつかしければ、この笛を吹く吹く帝の御前にさし寄りて、参らせたまふ。

〔狭衣〕九重の雲の上まで昇りなば天つ空をや**形見**とは見ん

と申すままに、いみじくあはれと思ひたるけしきながら、この天稚御子に引き立てられて立ちなんとするを、帝、東宮も、何しに、かかることせさせつらん、と悔しうて、笛をば取らで、手をとらへさせたまひて、いみじう泣かせたまへば：

(『狭衣物語』卷一―四四)

狭衣は横笛を帝に渡そうとするも、帝は受け取らず、狭衣の手を取つて引き止めている(傍線部)。笛の相伝に失敗している

のだ。続いて『源氏物語』の柏木遺愛の笛の場合だが、前述した通り、夕霧、源氏を経由して薫に相伝され、薫と柏木のつながりが示されている。その柏木遺愛の笛の来歴が源氏によって語られる箇所には、さらに『いはでしのぶ』との類似が確認できる。

⑥源氏、柏木の笛の来歴を語る

〔源氏〕「その笛はここに見るべきゆゑある物なり。かれは陽成院の御笛なり。それを、故式部卿宮のいみじきものにしたまひけるを、かの衛門督〔柏木〕は、童よりいとことなる音を吹き出でしに感じて、かの宮の萩の宴せられける日、贈物にとらせたまへるなり。」

〔源氏物語〕横笛巻―三六七、三六八

④で右大將が新二位中將に譲った笛に用いられている「嵯峨院」「月の宴」といった表現は、⑥の源氏の言葉にある「陽成院」「萩の宴」を踏まえたものと考えて良いだろう。柏木は故人であるため、笛は薫に直接手渡されていない。右大將とは状況が異なるが、相伝される笛であることを示すために、『いはでしのぶ』巻八の笛は、柏木の笛と類似した来歴を付与されたと考えられる。

『源氏物語』では、奏法と楽器の両方で、薫と柏木のつながりが示される。それに対し、『いはでしのぶ』で右大將が持つ楽器自体には、二位中將とのつながりは示されない。かわりに

右大將は、自ら笛そのものを新二位中將に相伝するのだ。『いはでしのぶ』の右大將の笛は、奏法と楽器を区別し、ずらして相伝の様相が示されている。今一度考えたいのは、笛そのものを譲渡する行為についてである。王朝物語文学には、これまで取り上げた場面以外でも笛の譲渡がたびたび描かれている。例えば『源氏物語』須磨巻では、京に戻る頭中將が「形見」として源氏に横笛を残しており、『浜松中納言物語』では、中納言が唐の五の君のもとに「形見に（巻一―六三二）と横笛を残している。これまで取り上げた『源氏物語』柏木の横笛、『狭衣物語』狭衣の横笛にも、共通して「形見」という言葉が用いられていた。現存本文には「形見」の文字が見えないが、出家を決意した右大將が笛を譲渡する『いはでしのぶ』も、先行作品と同様に笛を「形見」と捉えていたと考えて良いだろう。利沢麻美^{注17}の言葉を借りれば「若い貴公子にとって愛着の強い自分の形見になりうるもの、という属性」を横笛が持つために、配流や出家、死去といった所有者の存在がその場から喪失するような、人生の転機に連動して描かれるとも言える。「形見」として遺される笛そのものの相伝が、所有者の喪失を前提とするならば、笛の相伝可否は持ち主の男君の不在に左右される。死後十数年経って相伝の結果が判明する柏木は別として、存命中に自らの手で笛を譲渡しようとした狭衣と右大將は、どこか別の場所¹⁸に辿り着くために、笛の譲渡をしたようにも捉えられる。笛の譲渡に失敗した狭衣は、繰り返して天稚御子を思い出しては、共に天界に行きたかったという思いを滲ませている。鈴木

泰恵は、天稚御子により惹起された狭衣の昇天願望は、巻二から巻三の粉河詣でにおいて「兜率天憧憬にスライド」され、現世離脱の願望を手繰り寄せていると指摘する。狭衣は長きにわたって、天稚御子と共に行くはずだった天界に行くことを望んでいると言えよう。前節で考察したように、笛の音によって、狭衣のルーツは天にあることが示されていた。狭衣の天稚御子思慕は、自らの起源への回帰願望でもあるのだ。その願いは、帝への笛の譲渡が達成されなかったために叶わず、長らく狭衣を苦悩させる。このような『狭衣物語』の論理を当てはめて考えると、笛の譲渡に成功した『いはでしのぶ』の右大将も、自身のルーツがある場所への現世離脱、あるいは回帰を果たそうとしたと読み替えられる。右大将の笛の音は、彼のルーツが一条院の系譜にあることを示唆していた。出家を決意した右大将が向かうのは吉野だが、その直前に、一条院系の拠点だった伏見に立ち寄っている点は見逃せない。回帰を果たそうと向かった伏見の里は、かつての邸宅が全て御堂に改められ、人の気配もなく、「右大将が」見ぬ世の昔の面影（巻八一三四二）は残っていない。人里だった頃の伏見にルーツを持つ右大将は、現在の伏見に立ち寄っても回帰願望を満たせなかったのである。その代替地が吉野だと考えられるが、右大将にとって吉野がどんな場所なのかは現存本文では明らかにされない。物語の末尾は吉野に到着した場面ではなく、同行者である宰相中將との再会場面で閉じられている。行く先よりも、誰と共に行くかが重視されていたと捉えることもできるだろう。その宰相中

將は、「右大将の」御袖をひかへつつ（巻八一三四四）「右大将と合流し、右大将は宰相中將に「深かりける契り（巻八一三四四）」を感じ、二人は「うち語らひ給ひつつ（巻八一三四四）」吉野へ向かうのである。志を同じくし、深い契りで結ばれた者と新たな地に向かう右大将には、悲恋遁世譚らしい悲壮感が無い。むしろ、都にも伏見にも居場所を失った右大将は、宰相中將と吉野という新たな居場所を得て、孤独から救済されているかのようにもある。『狭衣物語』で狭衣の手を取ったのは、天稚御子ではなく帝だった。『いはでしのぶ』では、宰相中將に右大将の手を取らせ、吉野に同行させている。狭衣が希求しながら遂に叶わなかった天稚御子との道行は、右大将と宰相中將の新しい現世離脱に形を変えて、達成されているのではないか。

五、笛の奏法の相伝—異分子の鎮魂—

前節で、笛そのものを譲渡して吉野へと旅立つ右大将の様子を確認したが、彼の笛の奏法や音色の行方を追うために、再度『いはでしのぶ』の現存本文最後の笛の場面（前節引用④）を見直していく。手がかりとなるのは、横笛を譲渡する前後の、右大将と新二位中將の会話である。右大将に対面した新二位中將は、「久しく笛も吹き合はせ給はねば、わびしき心地なんしつる」と発言している。右大将は日常的に、新二位中將と笛を「吹き合はせ」ていたとわかる。ただ合奏していたのではなからう。右大将が新二位中將の笛を「笛竹の君に伝ふる声（巻八

「三三七」としたのは、楽器だけでなく、自身の奏法も相伝したからではないか。また右大将は、笛をただ譲るのではなく、その扱いについて新二位中将に遺言めいた言葉——「〔右大将を〕思し出でん折は、〔横笛を〕吹きて遊び給へ（巻八—三三七）」を残している。右大将は、自身が不在となる世界で、自身の楽器と奏法によつて自分が回想されることを望んでいるのだ。新二位中将が「もろともにはらぬ声（巻八—三三七）」が万世まで響き続けると返歌しているのも示唆的である。この点については横溝博も「こうして将来、二位中将によつて吹き立てられる笛の音は、右大将の音を写し取つて、人の記憶を呼び覚ますことになるのであろう」と指摘している。或いは、新二位中将もまた「音の限り」の奏法で笛を吹く可能性もあるだろう。一方で、物語がなぜ新二位中将にこのような笛の扱いをさせたのが気にかかる。新二位中将に摂関家の正嫡の地位を譲るだけなら、右大将の存在を音の中に残す必要はない。参照したいのは、巻四で即位した一品宮腹若君が白河院六十の賀で琴を奏でる場面である。

⑦即位した一品宮腹若君、管弦の遊びで琴を奏でる

……中にも上〔若君〕の御前、昔の調べはらぬ琴の御琴、女院〔一品宮〕の御世より伝へさせ給へるを、この折ならではと思さるるにや、おはします、弾かせ給へる、ただ古への〔内大臣と〕同じ御琴の音なれど、かれは澄みのぼる雲居をわけて言ふ限りなく音ばかりなりしを愛敬づき、た

をやかなる母宮〔一品宮〕の御方を添へて、いま少したぐひもなきを、言忌みすべき折もわかず、今さら昔を引き返し袖をしぼり給はぬ人なし。

（冷泉本巻四—三八四、三八五）

若君は、⑦傍線部で母一品宮由来の琴を一品宮に似た音で奏でている。同時に点線部のように、既に故人であった父内大臣の琴の音も再現しており、その音に触発された聴衆が波線部のように「昔」を回想している。白河院六十の賀において「言忌みすべき」過去の人物といえは、白河院と長らく対立関係にあった故一条院の落胤かつ、一品宮にまつわる噂で白河院の怒りを持った内大臣以外に考えられない。若君の演奏によつて回想されることで、忌むべき存在だった内大臣は、現在の王権の礎となった人物として再定義されると言えよう。それゆえに、人を「驚か」せる一条院系の音の特徴は影を潜め、若君によつて再現された内大臣の琴は、異分子の音とは捉えられないのである。例えば『うつほ物語』楼の上下巻で秘琴伝授を受けたいぬ宮の琴は、「その音の彼方にある、記憶の（音）」^{注20}を聴かせ、「祖先である俊蔭の霊を鎮めるために他ならない」^{注21}演奏だとされる。『いはでしのぶ』においても、物語世界から喪失した人物の奏法や音の再現に同じような意味が付与されているとすれば、若君の琴が鎮めているのは内大臣の魂である。右大将出家後、彼の笛の音を再現すると思われる新二位中将も同様だと考えられる。異分子の音を善きものとして再定義する新二位

中将の笛は、人を「驚か」せるものではなくなり、右大将鎮魂の音として物語世界に響いていくのだ。

裏返せば、内大臣と右大将は、鎮められる必要がある、何かの犠牲者なのである。彼らが何の犠牲となったかは、二人の音の共通点から探ることができる。前述したように、内大臣の琴・笛と右大将の高麗笛の音はいずれも人を「驚か」せる、一条院系の音であった。一条院と縁深い二人は、死と出家という形でそれぞれ物語世界から放逐された。彼らの喪失によって実現するのは、一品宮腹若君の即位と、新二位中将の関白職継承——つまり白河院系優位の王権および、摂関家だ。一条院の末裔を排除した世界が次に恐れるのは、彼らの恨みが再び世を乱すことである。残された者たちはその恐れを払拭するために、失われた彼らの音を善きものとして再現し、鎮魂するのではないか。『いほでしのぶ』において、右大将の笛の音は、特定の人物の鎮魂にとどまらず、物語世界全体に安寧をもたらすものとしても機能しているのである。

六、おわりに

以上見てきたように、『いほでしのぶ』巻八に集中して叙述される笛（横笛・高麗笛）は、『源氏物語』『狭衣物語』の表現を取り込み、それらと呼応しながら、楽器と奏法の相伝や音色の様相を描き出している。複雑に入り組む先行作品との類似と相違を読み解くと、本作が笛を用いて、出家遁世する右大将自

身の未来と過去に、救いを与えていることがわかる。宰相中将と吉野という新しい居場所を与え、孤独を癒す一方で、かつての居場所だった都に、笛の継承者である新二位中将の音を響かせ、物語世界から放逐された右大将を鎮魂する。二つの方法で救済される右大将は、世を破綻させる異分子ではなく、整った世の礎となった善き異分子として再定義される。その結果、彼を排除した物語世界に恨みの種を残さないことにも成功している。無常観が濃い悲恋遁世の結末に見える右大将の旅立ちが、新たな物語世界へ踏み出す始まりの場面としても捉えられることを、右大将物語の笛の音は示しているのである。

『いほでしのぶ』の物語前半は一品宮の琴が中心となることで、物語世界の楽の音が調律された。物語末尾の右大将の笛の場面を通して描かれたのは、異分子を排除することで、音の世界がさらに整然と統一されていく様子であった。三田村雅子は「困難に見えた家門復興を成しとげるストーリーが、天皇家の側からも、摂関家の側からも、二重にしかけられている」のが本作の特徴だと論じている。その二重構造は、「一条院系を復興させた内大臣と、右大臣家を復興させた二位中将に限らない。本稿では笛という切り口で本作を捉え直したが、琴や笛の楽の音についても、一品宮の琴には白河院系と一条院系の音が重なっている。右大将の笛にも、父二位中将を経由した白河院系の音と、母前斎院を経由した一条院系の音が重なっている。出自の異なる二つの音によって引き寄せられたのは、揺るぎない王権による、乱れない治世であった。対を成す二つの合力に

よって、物語は動き、物語世界は整えられていくという力学が、『いほでしのぶ』には貫かれているのではないか。

注

- 1 利沢麻美「音楽―源氏物語における横笛の役割―」（『源氏物語研究集成第十一巻 源氏物語の行事と風俗』風聞書房、二〇〇二年）
- 2 中川正美「王朝物語における音楽」（『平安文学研究』六九輯、一九八三年七月初出／『源氏物語と音楽』（和泉書院、二〇〇七年）所収）廣田収「『源氏物語』における音楽と系譜」（『源氏物語の探求 第十三輯』風聞書房、一九八八年）
- 3 以下、本作の琴についての詳細は拙稿『いほでしのぶ』の琴の琴―一品宮との「合はせ」―（『学習院大学国語国文学会誌』62号、二〇一九年三月）にて論じた。
- 4 若君の即位によって皇統の対立が解消されることは、横溝博『いほでしのぶ』の表現機構―皇統譜の喩としての桜―（『早稲田大学大学院文学研究科紀要』四十五号、二〇〇〇年）でも指摘されている。
- 5 『いほでしのぶ』の登場人物は、時期により呼称が変化するが、本稿では「内大臣・二位中将・一品宮・白河院・嵯峨院・前斎院・伏見大君・伏見中の君・右大将・若君・二品宮・新二位中将」に統一して記載することとする。そのため、引用本文でもこれらの呼称を「」内に適宜
- 6 補記している。
横溝博『いほでしのぶ』の右大将通世譚の方法―『今とりかへばや』取りをめぐって―（『国語と国文学』八十卷六号、二〇〇三年六月）
- 7 浅尾広良「柏木遺愛の笛とその相承」（『研究講座源氏物語の視界4 六条院の内と外』新典社、一九九七年）
- 8 高橋亨「横笛の時空―源氏物語の音楽とその主題的表現―」（『源氏研究 第4号』翰林書房、一九九九年四月初出／『源氏物語の詩学』名古屋大学出版会、二〇〇七年所収）
- 9 田村良平「『狭衣物語』の音楽描写」（『源氏物語と平安文学 第3集』早稲田大学出版部、一九九三年）
- 10 植田恭代「後期物語と雅楽―『狭衣物語』『夜の寝覚』『浜松中納言物語』の楽描写―」（『王朝物語と音楽』竹林舎、二〇〇九年）
- 11 小嶋菜温子「柏木の笛―幻の血脈へ―」（『源氏物語批評』有精堂出版、一九九五年）
- 12 内閣文庫本、第二、三、四系統の本文では「天地をも動かし給ふべきを」になっている。
- 13 前掲田村論文（注9）
- 14 井上眞弓「天界・地上・世人の構図の中で―狭衣の超俗的属性をめぐって―」（『狭衣物語の語りと引用』笠間書院、二〇〇五年）
- 15 今井上「古」と伝える音―源氏物語横笛巻の背景」（『源

- 氏物語と和歌』青簡舎、二〇〇八年）
 16 詳細は前掲拙稿（注3）にて論じた。

17 前掲利沢論文（注1）

- 18 鈴木泰恵「粉河詣で―「この世」への道筋」（『中古文学』41号、一九八八年五月初出）『狭衣物語／批評』翰林書房、二〇〇七年所収）

- 19 横溝博「『いはでしのぶ』右大将の「あはれなる事」について―二位中将への告別の場面をめぐって―」（『平安文学の風貌』武蔵野書院、二〇〇三年）

- 20 伊藤禎子「記憶の〈音〉」（『うつほ物語』と転倒させる快楽』森話社、二〇一一年）

- 21 大井田晴彦「栄花と鎮魂―『うつほ物語』「楼上」をめぐって―」（『叢書想像する平安文学第6巻 血と家のイリュージョン』勉誠出版、二〇〇一年）

- 22 三田村雅子「いはでしのぶ物語」（『体系物語文学史 第四巻』（物語文学の系譜Ⅱ 鎌倉物語Ⅰ）有精堂出版、一九八九年）

（付記）『いはでしのぶ』の本文引用は、『中世王朝物語全集4 いはでしのぶ』（笠間書院、二〇一七年）に拠り、小木喬『いはでしのぶ物語 本文と研究』（笠間書院、一九七七年）を参照した。適宜主語と呼称を（ ）に補記し、傍線を引き、巻名と頁数を付した。中略は…で示した。『源氏物語』『狭衣物語』

学館』による。それぞれ「源氏物語大成」（中央公論社）、『狭衣物語全註釈』（おうふう）で異同を確認した。